

〔資料〕

養護教諭の資質能力向上・成長の規定要因の検討

世一 和子¹⁾ 松本 訓枝²⁾ 小澤 和弘³⁾

Examination of the Rule Factor of Nature Ability Improvement and the Growth of Yogo-Teacher

Kazuko Yoichi¹⁾, Kunie Matsumoto²⁾ and Kazuhiro Ozawa³⁾

I. はじめに

養護教諭の資質能力向上・成長での課題は、学校内に専門職としての養護教諭が一人しかいないため初任の段階から一人で執務をし、身近に養護教諭のモデルがなく、同職種からの日常的な指導を受けられない、観て学ぶことができないことと考える。このことに加えて、自分に厳しくするのも、自分に甘くするのも本人次第である。一人の配置がゆえに外からは見えにくい部分がある。また、中堅以降では一人の配置がゆえに自分の職務内容について、学校内の同職種の養護教諭に対して指導する機会がない。人によっては児童生徒の健康観察や保健指導、生徒指導・教育相談に関して学校内の担任等他職種に指導していることはあるが、同職種の養護教諭への指導は複数配置や教育実習生の担当ではない限りすることはないという現実である。このように、養護教諭が自身の資質能力を向上させ、成長するためには、勤務校での体制で指導する機会の有無や養護教諭自身の勤務環境や状況等に委ねられている部分が大きいと思われる。

養護教諭の資質能力向上・成長について、大谷ら(1984)、小林(1996)、山道ら(2002)によって研究されて、「仕事が好きである」等の仕事への生きがいや、自己成長の源泉となり実践につながっていくことや、自己研修が養護教諭の成長と最も関係していることが明らかになっている。そして、新任期には学校や教師の文化を学び他校の経験ある養護教諭から執務についての伝承がなされていて、中堅期には研修への参加によって成長し

ていることが示されている。また、小林(1997)の研究では成長の諸契機の体験や思い出を分析しており、「成長カーブ」として初任時をゼロとし主観的に自身の成長を、10段階に評価し自由に作成した折れ線グラフから成長型のタイプ別にして20名に個別面接している。その結果から、新任期に顕著に成長した者は、新任期には良い思い出を次々と話し幸運な出発(よい指導者との出会い等)が成長に影響を与えていることが明らかになっている。また、中堅期は新任期の出発の時期とは違い、養護教諭の活動や力量形成に影響を与える出来事の出会いの時期であることが明らかになっている。

しかし、地域によって勤務体制等(校種間の異動の有無、同一校での勤続年数、研修制度、採用状況など)が異なるため、本研究ではA県内の小中学校の養護教諭が、どのようにして資質能力を向上させ、成長しているのかを質問紙調査から量的・質的な分析によって明らかにし、その規定要因を抽出した上で、先行研究で明らかになっている養護教諭の資質能力向上・成長の規定要因と同様な傾向であるのかを検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 調査対象

A県内の12年目研修を終了した13年以上経験の小中学校の養護教諭(常勤・非常勤講師期間を含めない)を対象とした。常勤・非常勤講師とは正式に採用されていない雇用であり、短期間で異動や退職することがある。ま

1) 岐阜県立看護大学 育成期看護学領域 Nursing in Children and Child Rearing Families, Gifu College of Nursing

2) 岐阜県立看護大学 機能看護学領域 Management in Nursing, Gifu College of Nursing

3) 岐阜県立看護大学 看護研究センター Nursing Collaboration Center, Gifu College of Nursing

た、常勤・非常勤講師は12年目研修の対象ではなく、研修を受けていない。常勤・非常勤講師の期間においても資質能力向上・成長は当然みられるものの、本研究では継続的な資質能力向上・成長についての調査を12年目研修の終了した養護教諭を対象に行いたいと考えたため、常勤・非常勤講師の期間を含めないこととした。

2. 調査方法

本調査の主旨やプライバシーに関する説明、13年以上経験の小中学校の養護教諭が調査対象であることなどを明記した研究説明書、自由意思によって回答できるようにした無記名による質問紙、切手が貼付された返信用封筒を同封したものを、配付時は配付先養護教諭の経験年数は不明であるためA県内全小中学校の養護教諭583名へ配付して回答を返送してもらった。

3. 調査期間

2012年3～10月に調査を実施した。3月に質問紙を郵送にて配付し5月末の締め切りにしたが回収率が悪かったため、6月末に開催されたA県内養護教諭代議員会に参加している郡市代表の養護教諭に、それ以後行われる各郡市の部会の参加者全体に向けて調査協力の呼びかけを依頼した。締め切りは10月末とした。

4. 調査内容及び分析方法

1) 個人属性

初任校からこれまで勤務した学校の勤務年数（常勤・非常勤講師期間を含めない）を記入してもらい、経験年数を算出した。山道ら（2002）等の「教員の成長」に関する先行研究の多くは、対象者の経験年数区分を10年未満、10～19年、20～29年、30年以上という10年間隔のグループ化にしている。今回の研究ではA県において必修研修としては最後の12年目研修を終えた養護教諭を対象としたため、13年目から定年までの26年間を8～9年間隔となる「13～20年」「21～28年」「29年以上」の3群に分類した。

2) 成長型のタイプ

小林（1997）の研究で用いられた「成長カーブ」（図1）を用いて、初任時をゼロとし主観的に自身の成長を10段階に評価した折れ線グラフを自由に作成してもらった。それを小林（1997）の作成した8つの型（1年目で急上昇、1年目でやや上昇、3年目までで急上昇、5～7年目まで急上昇、3年目から急上昇、8年目から急上昇、12～

14年目から急上昇、その他）を参考に、調査対象の経験年数が13年目以上であることや、新任期と中堅期の成長に着目しその時期の成長を浮き彫りにしたいと考え3タイプで分類した。それらのタイプは1年目から6年目が終了するまでにある程度の（急）上昇したカーブをⅠ型、7年目から13年目に（急）上昇したカーブをⅡ型、1年目から13年目までに特徴的な上昇がみられないなど、いずれの型にも属さないⅢ型とした。

3) 成長に役立ったこと

(1)新任から現在までの実践や学び等について、「勤務した各校での実践・努力や苦心したこと」「学び・身に付けた力」の2項目の問いについてそれぞれ記述してもらった。これらの記述内容を意味内容が分かる単位で区切って要約しコード化した後、さらに内容の類似性により分類し、カテゴリー化した。

(2)教育実践や教育に対する考え方に影響を及ぼし、変化を生み出したと思われる事柄の有用度を調査した。質問項目は17項目で、山道ら（2002）の研究で用いられた「成長に役立ったこと」の項目を参考に作成した。内容は、「教育実践上の経験（特定の子どもとの出会い、関わりでの出来事など）」「学校外でのすぐれた人物（養護教諭仲間、友人など）との出会い」「学校内

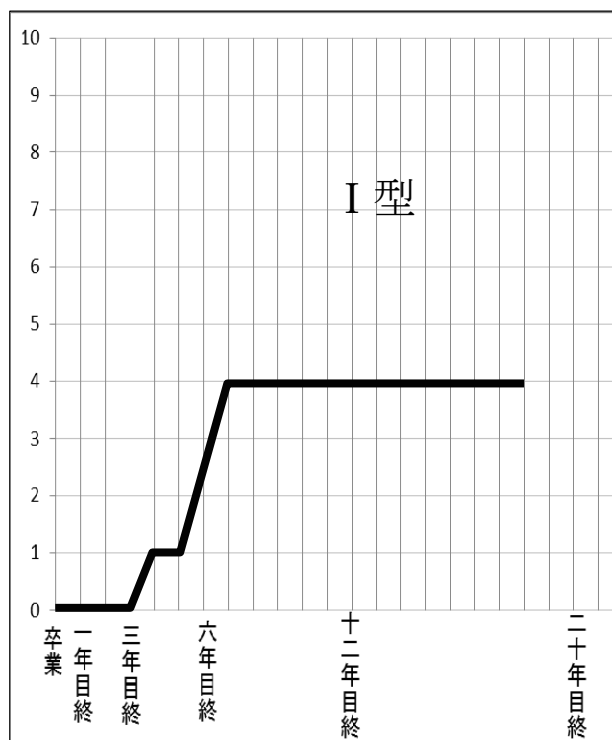


図1 「成長カーブ」記入例

でのすぐれた人物（先輩・後輩・同僚・管理職など）との出会い」「自分自身の意欲や努力」「学校外での研究活動（内地留学・各種講習会・学会・研究会など）」「個人及び家庭生活における変化（疾病体験、重要他者の死、結婚、子どもの誕生、宗教など）」「すぐれた書物との出会い」「職能団体（県・市町村の養護教諭部会や組合など）での活動」「養護教諭養成教育時代の学び・経験」「学校内での研究活動」「新任地の研修」「社会問題や政治情勢への関心・理解」「教育界・教育行政の動向への関心・理解」「社会活動（ボランティア活動・スポーツなど）」「地域と学校への着目（地域の健康・教育課題発見）」「職務上の役割の変化（保健主事登用、教科保健担当、指導主事など）」「養護教諭実習生の指導や後輩への指導」である。これらの項目について「非常に役に立った」「少し役に立った」「あまり役に立たなかった」「全く役に立たなかった」の4件法で実施した。これらの回答を項目ごとに経験年数別と成長型のタイプ別に4件の割合を算出した。また、成長型のタイプ、および経験年数と「成長に役立ったこと」の関係について、「非常に役に立った」を4、「少し役に立った」を3、「あまり役に立たなかった」を2、「全く役に立たなかった」を1で点数化してKruskal-Wallis 検定、およびMann-Whitney のU検定を用いたBonferroni法による多重比較を行った。

なお、統計分析にはIBM SPSS Statistics 20を使用し、有意水準は0.05を用いた。ただし、多重比較では、Bonferroni法により調整した有意水準 $0.05/3=0.017$ を用いた。

5. 倫理的配慮

対象となるA県内の小中学校の養護教諭への説明書には、13年以上経験の小中学校の養護教諭が調査対象であること、研究への参加は自由意思であること、養護教諭

の勤務評定には影響がないこと、協力の得られない場合には不利益を被らないことを明記した。対象の養護教諭に、本研究の説明書と調査用紙と封筒を配付し、その配付した封筒にて記入した調査用紙の返送をもって研究に同意・協力が得られたものとし、分析にあたってデータはすべて統計的に処理し、個人が特定されることはないこと、個人のプライバシーを守秘することに努めた。また、13年以上経験の養護教諭以外から回答が送付された場合はデータとして扱わないこととし、研究の報告等の公表の際にこのことを記載することとした。

本研究は、岐阜県立看護大学研究倫理審査部会の承認（承認番号0036）を受けて行った。

Ⅲ. 結果

A県内全小中学校の養護教諭（583名）へ質問紙を配付し回答を返送してもらった。全回収数は110名（回収率18.9%）で、すべてが13年以上経験者であった。この110名のうち「成長カーブ」と「成長に役立ったこと」の記述も含め全てに回答した109名を有効回答とし分析対象とした。

1. 対象の経験年数別数

経験年数の平均値は、26.7（SD=6.9）年であり、最小値13年、最大値40年であった。また、13～20年目が21名（19.2%）、21～28年が38名（34.9%）、29年以上が50名（45.9%）であった。

2. 成長型のタイプ

I型が58名（53.2%）、II型が36名（33.0%）、III型が15名（13.8%）であった。

これら経験年数と成長型のタイプの対象数のクロスを表1に示した。経験年数別に成長型のタイプの割合に有意差があるかカイ二乗検定を行った結果、有意差はみられなかった。

表1 経験年数と成長型のタイプの対象数クロス表

経験年数	人数 (%)			
	I 型	II 型	III 型	計
13～20年	10 (47.6)	9 (42.9)	2 (9.5)	21 (100.0)
21～28年	20 (52.6)	11 (28.9)	7 (18.4)	38 (100.0)
29年以上	28 (56.0)	16 (32.0)	6 (12.0)	50 (100.0)
計	58 (53.2)	36 (33.0)	15 (13.8)	109 (100.0)

$$\chi^2 (4) = 2.01 \quad P = .734$$

3. 成長に役立ったこと

1) 「勤務した各校での実践・努力や苦心したこと」について

データから972のコードを抽出し質的な内容分析を行い、4つのカテゴリーと11のサブカテゴリーが抽出された。【子どもの健康課題への対応】では<健康教育の推進を工夫><特定な子どもへの関わり・対応><組織としての活動に関すること><養護教諭の執務に関すること><研究への取り組み>、【教員としての関わり・対応】では<勤務体制によるもの><教育職としてのこと>、【自身の気持ちや生活のこと】では<自身の意欲等の気持ちの面><自身の私生活>、【仲間の養護教諭との協働】では<役割・立場によるもの><近隣の養護教諭の力を借りる>であった。

2) 「学び・身に付けた力」について

データから613のコードを抽出し質的な内容分析を行い、5つのカテゴリーと14のサブカテゴリーが抽出された。【専門的な力】では<健康教育の推進><組織として活動><養護教諭の基本的な執務><研究><養護教諭としてのスタンス>、【子どもと関わる力】では<子どもに寄り添う><特定な子どもに関わる><子どもを多面的に捉える><保護者対応><生徒指導>、【内面の力】では<意欲をもつ>、【教育面の力】では<教育職員として><校務分掌の中で>、【養護教諭仲間としての力】では<仲間との協働>であった。

3) 教育実践や教育の考え方に影響し、変化を生み出した事柄について

(1) 質問項目毎の回答全数 (109名) の結果

「非常に役に立った」と回答した割合が高かったのは、「教育実践上の経験」(86.2%)、「学校内でのすぐれた人物との出会い」(82.6%)、「学校外でのすぐれた人物との出会い」(78.0%)であった。

また、「非常に役に立った」と「少し役に立った」の回答を合わせると90%以上であった項目は、「学校外でのすぐれた人物との出会い」(98.2%)、「学校内でのすぐれた人物との出会い」(98.2%)、「教育実践上の経験」(97.2%)、「自分自身の意欲や努力」(94.5%)、「学校外での研究活動」(91.8%)であった。

「全く役に立たなかった」と「あまり役に立たなかった」の回答を合わせると30%以上であった項目は、「社

会活動」(37.6%)、「養護教諭養成教育時代の学び・経験」(32.1%)、「学校内での研究活動」(31.2%)であった。

(2) 経験年数別と成長型のタイプ別の結果

①経験年数別の結果

「非常に役に立った」と回答した割合が経験年数別で差があったのは、「すぐれた書物との出会い」で、13～20年経験者が14.3%、29年以上の経験者が28.0%、「職能団体での活動」で、13～20年経験者が28.6%、21～28年経験者が50.0%であり、他は大きな差が見られなかった。

また、「非常に役に立った」から「全く役に立たなかった」を4から1で点数化し、経験年数と各項目との関連をKruskal-Wallis 検定およびBonferroni法を用いてMann-Whitney のU検定による多重比較を行った結果、全ての項目で有意差はみられなかった。

②成長型のタイプ別の結果

「非常に役に立った」と回答した割合が成長型のタイプ別で差があったのは、「自分自身の意欲や努力」でⅡ型68.6%、Ⅲ型20.0%、「職能団体での活動」でⅡ型52.8%、Ⅲ型13.3%、「地域と学校への着目」でⅡ型22.2%、Ⅲ型6.7%、「養護教諭実習生の指導や後輩への指導」でⅡ型33.3%、Ⅲ型6.7%であった。「学校内での研究活動」「新任地の研修」「社会問題や政治情勢への関心・理解」「教育界・教育行政の動向への関心・理解」で「非常に役に立った」とする回答はⅢ型が0%であった。

また、「非常に役に立った」から「全く役に立たなかった」を4から1で点数化し、成長型と各項目との関連をKruskal-Wallis 検定で分析した結果、「教育実践上の経験」($p=.0006$)、「学校内でのすぐれた人物との出会い」($p=.030$)、「自分自身の意欲や努力」($p=.0009$)、「学校外での研究活動」($p=.042$)、「学校内での研究活動」($p=.001$)「地域と学校への着目」($p=.016$)の項目について有意差がみられた。

さらに、Bonferroni法により有意水準を0.0167としてMann-Whitney のU検定で多重比較を行った結果、「教育実践上の経験」では、Ⅰ型とⅢ型($p=.004$)、Ⅱ型とⅢ型($p=.0004$)に有意差があり、「学校内での研究活動」においても、Ⅰ型とⅢ型($p=.004$)、Ⅱ型とⅢ型($p=.0004$)に有意差があり、両項目ともⅠ型とⅡ型がⅢ型より有意に高かった。「自分自身の意欲や努力」では、Ⅰ型とⅡ型($p=.003$)、Ⅱ型とⅢ型($p=.001$)に有意差が

表2 教育実践や教育に対する考え方に影響を及ぼし、変化を生み出したと思われる事柄の認識度（全体）

項 目	人数 (%) n=109					無回答
	非常に役に立った	少し役に立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった		
教育実践上の経験（特定の子どもとの出会い、関わりでの出来事など）	94 (86.2)	12 (11.0)	1 (0.9)	0 (0.0)	2 (1.8)	
学校外でのすぐれた人物（養護教諭仲間、友人など）との出会い	85 (78.0)	22 (20.2)	1 (0.9)	0 (0.0)	1 (0.9)	
学校内でのすぐれた人物（先輩・後輩・同僚・管理職など）との出会い	90 (82.6)	17 (15.6)	2 (1.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
自分自身の意欲や努力	49 (45.0)	54 (49.5)	5 (4.6)	0 (0.0)	1 (0.9)	
学校外での研究活動（内地留学・各種講習会・学会・研究会など）	51 (46.8)	49 (45.0)	8 (7.3)	1 (0.9)	0 (0.9)	
個人及び家庭生活における変化（疾病体験、重要他者の死、結婚、子どもの誕生、宗教など）	59 (54.1)	39 (35.8)	10 (9.2)	1 (0.9)	0 (0.9)	
すぐれた書物との出会い	27 (24.8)	61 (56.0)	19 (17.4)	1 (0.9)	1 (0.9)	
職能団体（県・市町村の養護教諭部会や組合など）での活動	47 (43.1)	42 (38.5)	16 (14.7)	3 (2.8)	1 (0.9)	
養護教諭養成教育時代の学び・経験	11 (10.1)	63 (57.8)	29 (26.6)	6 (5.5)	0 (0.9)	
学校内での研究活動	17 (15.6)	56 (51.4)	31 (28.4)	3 (2.8)	2 (1.8)	
新任地の研修	13 (11.9)	60 (55.0)	28 (25.7)	3 (2.8)	5 (4.6)	
社会問題や政治情勢への関心・理解	10 (9.2)	67 (61.5)	27 (24.8)	3 (2.8)	2 (1.8)	
教育界・教育行政の動向への関心・理解	8 (7.3)	73 (67.0)	24 (22.0)	3 (2.8)	1 (0.9)	
社会活動（ボランティア活動・スポーツなど）	14 (12.8)	53 (48.6)	34 (31.2)	7 (6.4)	1 (0.9)	
地域と学校への着目（地域の健康・教育課題発見）	17 (15.6)	61 (56.0)	30 (27.5)	1 (0.9)	0 (0.9)	
職務上の役割の変化（保健主事登用、教科保健担当、指導主事など）	23 (21.1)	57 (52.3)	23 (21.1)	3 (2.8)	3 (2.8)	
養護教諭実習生の指導や後輩への指導	23 (21.1)	61 (56.0)	23 (21.1)	0 (0.0)	2 (1.8)	

あり、Ⅱ型がⅠ型及びⅢ型より有意に高かった。また、「学校内でのすぐれた人物」ではⅡ型がⅢ型より有意に高く ($p=.007$)、「地域と学校への着目」においても、Ⅱ型がⅢ型より有意に高かった ($p=.006$)。「学校外での研究活動」ではⅡ型がⅠ型より有意に高かった ($p=.011$)。

Ⅳ. 考察

質問紙調査から養護教諭の資質能力向上・成長の規定要因には、「教育実践上の経験」等を意味付ける『日々の実践』、外部からの影響を大切にする『学校外のネットワーク』、自身の意欲を高める『自己啓発』が示唆された。以下、具体的に述べる。

1. 『日々の実践』に関して

成長に役立ったことで「非常に役に立った」と回答した割合が高かった項目「教育実践上の経験」(86.2%)、「学校内でのすぐれた人物との出会い」(82.6%)は毎日の執務や実践においての内容と捉えられる。つまり

『日々の実践』に関しての経験が大きく影響し、その実践の過程で養護教諭としての成長を遂げていることが推察された。『日々の実践』の中で、特定の子どもとの出会い、関わりでの出来事などの「教育実践上の経験」を、いかに自分の学びや実践につなげ、位置付け価値付けることができるかが、養護教諭だけでなく教員の資質能力向上・成長にとって重要なことである。また、山道ら(2002)の研究結果でも資質向上には同僚との協働・組織活動からの影響があると述べているように、管理職や同僚等から教育の本質や生徒指導、教育相談等の教育観・子ども観について学び得たことを、いかに自分の学びとして位置付け価値付けられるかが、養護教諭の資質能力向上・成長にとって大切であると考えられる。すなわち、校内での他職種との出会いをどう捉えるかが重要であろう。養護教諭の力量形成の出発点は、まず子ども一人一人の問題や発達課題を周りの教職員と共に豊かに深く理解することで学校全体の子どもを見る力が高まる

表3 経験年数別の成長に役立ったことの有用度

項 目		経験年数			Kruskal-Wallis 検定 ^{a)} 多重比較 ^{a),b)}
		①13～20年 n=21	②21～28年 n=38	③29年以上 n=50	
		人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)	
教育実践上の経験（特定の子どもとの出会い、関わりでの出来事など）	非常に役に立った	19 (90.5)	33 (86.8)	42 (84.0)	p=.843 ①>②, p=.927 ①>③, p=.643 ②>③, p=.635
	少し役に立った	1 (4.8)	4 (10.5)	7 (14.0)	
	あまり役に立たなかった	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	1 (2.6)	1 (2.0)	
学校外でのすぐれた人物（養護教諭仲間、友人など）との出会い	非常に役に立った	16 (76.2)	29 (76.3)	40 (80.0)	p=.772 ①<②, p=.915 ①<③, p=.548 ②<③, p=.546
	少し役に立った	4 (19.0)	9 (23.7)	9 (18.0)	
	あまり役に立たなかった	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	
学校内でのすぐれた人物（先輩・後輩・同僚・管理職など）との出会い	非常に役に立った	20 (95.2)	33 (86.8)	37 (74.0)	p=.074 ①>②, p=.304 ①>③, p=.041 ②>③, p=.156
	少し役に立った	1 (4.8)	4 (10.5)	12 (24.0)	
	あまり役に立たなかった	0 (0.0)	1 (2.6)	1 (2.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
自分自身の意欲や努力	非常に役に立った	10 (47.6)	18 (47.4)	21 (42.0)	p=.880 ①>②, p=.755 ①>③, p=.603 ②>③, p=.847
	少し役に立った	11 (52.4)	17 (44.7)	26 (52.0)	
	あまり役に立たなかった	0 (0.0)	3 (7.9)	2 (4.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	
学校外での研究活動（内地留学・各種講習会・学会・研究会など）	非常に役に立った	9 (42.9)	18 (47.4)	24 (48.0)	p=.986 ①<②, p=.866 ①<③, p=.889 ②>③, p=.981
	少し役に立った	11 (52.4)	17 (44.7)	21 (42.0)	
	あまり役に立たなかった	1 (4.8)	2 (5.3)	5 (10.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
個人及び家庭生活における変化（疾病体験、重要他者の死、結婚、子どもの誕生、宗教など）	非常に役に立った	14 (66.7)	17 (44.7)	28 (56.0)	p=.306 ①>②, p=.188 ①>③, p=.628 ②<③, p=.215
	少し役に立った	4 (19.0)	16 (42.1)	19 (38.0)	
	あまり役に立たなかった	3 (14.3)	4 (10.5)	3 (6.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
すぐれた書物との出会い	非常に役に立った	3 (14.3)	10 (26.3)	14 (28.0)	p=.840 ①<②, p=.753 ①<③, p=.546 ②<③, p=.780
	少し役に立った	14 (66.6)	20 (52.6)	27 (54.0)	
	あまり役に立たなかった	3 (14.3)	8 (21.1)	8 (16.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	
	無回答	1 (4.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	
職能団体（県・市町村の養護教諭部会や組合など）での活動	非常に役に立った	6 (28.6)	19 (50.0)	22 (44.0)	p=.105 ①<②, p=.042 ①<③, p=.097 ②>③, p=.475
	少し役に立った	8 (38.1)	14 (36.8)	20 (40.0)	
	あまり役に立たなかった	6 (28.6)	2 (5.2)	8 (16.0)	
	全く役に立たなかった	1 (4.8)	2 (5.2)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	
養護教諭養成教育時代の学び・経験	非常に役に立った	1 (4.8)	3 (7.9)	7 (14.0)	p=.887 ①<②, p=.935 ①<③, p=.688 ②<③, p=.692
	少し役に立った	13 (61.9)	23 (60.5)	27 (54.0)	
	あまり役に立たなかった	7 (33.3)	9 (23.7)	13 (26.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	3 (7.9)	3 (6.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
学校内での研究活動	非常に役に立った	5 (23.8)	6 (15.8)	6 (12.0)	p=.163 ①>②, p=.070 ①>③, p=.230 ②<③, p=.301
	少し役に立った	12 (57.1)	15 (39.5)	29 (58.0)	
	あまり役に立たなかった	4 (19.0)	16 (42.1)	11 (22.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	1 (2.6)	2 (4.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (4.0)	
新任地の研修	非常に役に立った	3 (14.3)	4 (10.5)	6 (12.0)	p=.294 ①>②, p=.119 ①>③, p=.203 ②<③, p=.721
	少し役に立った	15 (71.4)	19 (50.0)	26 (52.0)	
	あまり役に立たなかった	3 (14.3)	12 (31.6)	13 (26.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	1 (2.6)	2 (4.0)	
	無回答	0 (0.0)	2 (5.2)	3 (6.0)	
社会問題や政治情勢への関心・理解	非常に役に立った	2 (9.5)	5 (13.2)	3 (6.0)	p=.512 ①>②, p=.861 ①<③, p=.401 ②<③, p=.281
	少し役に立った	12 (57.1)	19 (50.0)	36 (72.0)	
	あまり役に立たなかった	7 (33.3)	12 (31.6)	8 (16.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	2 (5.3)	1 (2.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (4.0)	
教育界・教育行政の動向への関心・理解	非常に役に立った	2 (9.5)	2 (5.3)	4 (8.0)	p=.278 ①<②, p=.308 ①<③, p=.123 ②<③, p=.492
	少し役に立った	10 (47.6)	27 (71.1)	36 (72.0)	
	あまり役に立たなかった	9 (42.9)	8 (21.1)	7 (14.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	1 (2.6)	2 (4.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	
社会活動（ボランティア活動・スポーツなど）	非常に役に立った	3 (14.3)	4 (10.5)	7 (14.0)	p=.430 ①<②, p=.459 ①<③, p=.203 ②<③, p=.528
	少し役に立った	7 (33.3)	20 (52.6)	26 (52.0)	
	あまり役に立たなかった	9 (42.9)	11 (28.9)	14 (28.0)	
	全く役に立たなかった	2 (9.5)	3 (7.9)	2 (4.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (2.0)	
地域と学校への着目（地域の健康・教育課題発見）	非常に役に立った	3 (14.3)	6 (15.8)	8 (16.0)	p=.857 ①<②, p=.786 ①<③, p=.582 ②<③, p=.766
	少し役に立った	11 (52.4)	21 (55.3)	29 (58.0)	
	あまり役に立たなかった	7 (33.3)	10 (26.3)	13 (26.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	1 (2.6)	0 (0.0)	
	無回答	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
職務上の役割の変化（保健主事登用、教科保健担当、指導主事など）	非常に役に立った	4 (19.0)	8 (21.1)	11 (22.0)	p=.473 ①>②, p=.758 ①<③, p=.532 ②<③, p=.225
	少し役に立った	10 (47.6)	16 (42.1)	31 (62.0)	
	あまり役に立たなかった	4 (19.0)	13 (34.2)	6 (12.0)	
	全く役に立たなかった	1 (4.8)	0 (0.0)	2 (4.0)	
	無回答	2 (9.5)	1 (2.6)	0 (0.0)	
養護教諭実習生の指導や後輩への指導	非常に役に立った	4 (20.0)	9 (23.7)	10 (20.0)	p=.703 ①>②, p=.413 ①>③, p=.550 ②<③, p=.712
	少し役に立った	14 (70.0)	18 (47.4)	29 (58.0)	
	あまり役に立たなかった	2 (10.0)	11 (28.9)	10 (20.0)	
	全く役に立たなかった	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	
	無回答	1 (4.8)	0 (0.0)	1 (2.0)	

a)：「非常に役に立った」から「全く役に立たなかった」を4から1で点数化して分析した。ただし、無回答は分析対象外とした。

b)：Mann-WhitneyのU検定による多重比較の結果であり、有意水準はBonferroni法で調整した0.05/3=0.017を用いた。また、①②③はそれぞれ「13～20年」「21～28年」「29年以上」を表し、不等号は平均順位の大小関係を表す。

表4 成長型によるタイプ別の成長に役立ったことの有用度

項 目		成長型タイプ						Kruskal-Wallis 検定 ^{a)}
		Ⅰ 型 n=58		Ⅱ 型 n=36		Ⅲ 型 n=15		多重比較 ^{a),b)}
		人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	
教育実践上の経験（特定の子どもとの出会い、関わりでの出来事など）	非常に役に立った	51	(87.9)	35	(97.2)	8	(53.3)	p=.0006 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.187 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.004 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.0004
	少し役に立った	6	(10.3)	0	(0.0)	6	(40.0)	
	あまり役に立たなかった	0	(0.0)	1	(2.8)	0	(0.0)	
	全く役に立たなかった	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	1	(1.7)	0	(0.0)	1	(6.7)	
学校外でのすぐれた人物（養護教諭仲間、友人など）との出会い	非常に役に立った	44	(75.9)	30	(83.3)	11	(73.3)	p=.666 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.457 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.785 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.417
	少し役に立った	12	(20.7)	6	(16.7)	4	(26.7)	
	あまり役に立たなかった	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	全く役に立たなかった	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	
学校内でのすぐれた人物（先輩・後輩・同僚・管理職など）との出会い	非常に役に立った	48	(82.8)	33	(91.7)	9	(60.0)	p=.030 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.212 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.077 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.007
	少し役に立った	8	(13.8)	3	(8.3)	6	(40.0)	
	あまり役に立たなかった	2	(3.4)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	全く役に立たなかった	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
自分自身の意欲や努力	非常に役に立った	22	(37.9)	24	(68.6)	3	(20.0)	p=.0009 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.003 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.132 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.001
	少し役に立った	33	(56.9)	11	(31.4)	10	(66.7)	
	あまり役に立たなかった	3	(5.2)	0	(0.0)	2	(13.3)	
	全く役に立たなかった	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
学校外での研究活動（内地留学・各種講習会・学会・研究会など）	非常に役に立った	22	(37.9)	22	(61.1)	7	(46.7)	p=.042 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.011 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.641 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.208
	少し役に立った	29	(50.0)	14	(38.9)	6	(40.0)	
	あまり役に立たなかった	6	(10.3)	0	(0.0)	2	(13.3)	
	全く役に立たなかった	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
個人及び家庭生活における変化（疾病体験、重要他者の死、結婚、子どもの誕生、宗教など）	非常に役に立った	32	(55.2)	22	(61.1)	5	(33.3)	p=.176 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.856 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.073 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.104
	少し役に立った	23	(39.7)	9	(25.0)	7	(46.7)	
	あまり役に立たなかった	2	(3.4)	5	(13.9)	3	(20.0)	
	全く役に立たなかった	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
すぐれた書物との出会い	非常に役に立った	14	(24.1)	11	(30.6)	2	(13.3)	p=.096 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.192 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.201 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.033
	少し役に立った	31	(53.4)	22	(61.1)	8	(53.3)	
	あまり役に立たなかった	12	(20.7)	3	(8.3)	4	(26.7)	
	全く役に立たなかった	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(6.7)	
	無回答	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	
職能団体（県・市町村の養護教諭部会や組合など）での活動	非常に役に立った	26	(44.8)	19	(52.8)	2	(13.3)	p=.093 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.314 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.139 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.022
	少し役に立った	20	(34.5)	13	(36.1)	9	(60.0)	
	あまり役に立たなかった	10	(17.2)	3	(8.3)	3	(20.0)	
	全く役に立たなかった	2	(3.4)	1	(2.8)	0	(0.0)	
	無回答	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(6.7)	
養護教諭養成教育時代の学び・経験	非常に役に立った	7	(12.1)	3	(8.3)	1	(6.7)	p=.347 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.664 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.243 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.138
	少し役に立った	32	(55.2)	24	(66.7)	7	(46.7)	
	あまり役に立たなかった	16	(27.6)	8	(22.2)	5	(33.3)	
	全く役に立たなかった	3	(5.2)	1	(2.8)	2	(13.3)	
	無回答	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
学校内での研究活動	非常に役に立った	8	(13.8)	9	(25.0)	0	(0.0)	p=.001 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.119 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.004 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.0004
	少し役に立った	32	(55.2)	20	(55.6)	4	(26.7)	
	あまり役に立たなかった	15	(25.9)	7	(19.4)	9	(60.0)	
	全く役に立たなかった	2	(3.4)	0	(0.0)	1	(6.7)	
	無回答	1	(1.7)	0	(0.0)	1	(6.7)	
新任地の研修	非常に役に立った	6	(10.3)	7	(19.4)	0	(0.0)	p=.342 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.383 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.372 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.159
	少し役に立った	31	(53.4)	20	(55.6)	9	(60.0)	
	あまり役に立たなかった	17	(29.3)	7	(19.4)	4	(26.7)	
	全く役に立たなかった	0	(0.0)	2	(5.6)	1	(6.7)	
	無回答	4	(6.9)	0	(0.0)	1	(6.7)	
社会問題や政治情勢への関心・理解	非常に役に立った	5	(8.6)	5	(13.9)	0	(0.0)	p=.127 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.185 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.288 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.046
	少し役に立った	34	(58.6)	24	(66.7)	9	(60.0)	
	あまり役に立たなかった	15	(25.9)	7	(19.4)	5	(33.3)	
	全く役に立たなかった	2	(3.4)	0	(0.0)	1	(6.7)	
	無回答	2	(3.4)	0	(0.0)	0	(0.0)	
教育界・教育行政の動向への関心・理解	非常に役に立った	5	(8.6)	3	(8.3)	0	(0.0)	p=.062 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.516 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.054 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.019
	少し役に立った	38	(65.5)	27	(75.0)	8	(53.3)	
	あまり役に立たなかった	13	(22.4)	5	(13.9)	6	(40.0)	
	全く役に立たなかった	1	(1.7)	1	(2.8)	1	(6.7)	
	無回答	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	
社会活動（ボランティア活動・スポーツなど）	非常に役に立った	8	(13.8)	5	(13.9)	1	(6.7)	p=.347 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.487 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.305 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.145
	少し役に立った	27	(46.6)	20	(55.6)	6	(40.0)	
	あまり役に立たなかった	20	(34.5)	7	(19.4)	7	(46.7)	
	全く役に立たなかった	3	(5.2)	3	(8.3)	1	(6.7)	
	無回答	0	(0.0)	1	(2.8)	0	(0.0)	
地域と学校への着目（地域の健康・教育課題発見）	非常に役に立った	8	(13.8)	8	(22.2)	1	(6.7)	p=.016 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.056 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.127 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.006
	少し役に立った	32	(55.2)	23	(63.9)	6	(40.0)	
	あまり役に立たなかった	17	(29.3)	5	(13.9)	8	(53.3)	
	全く役に立たなかった	1	(1.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
職務上の役割の変化（保健主事登用、教科保健担当、指導主事など）	非常に役に立った	10	(17.9)	10	(27.8)	3	(20.0)	p=.261 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.210 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.447 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.158
	少し役に立った	32	(57.1)	19	(52.8)	6	(40.0)	
	あまり役に立たなかった	13	(23.2)	5	(13.9)	5	(33.3)	
	全く役に立たなかった	1	(1.8)	1	(2.8)	1	(6.7)	
	無回答	0	(0.0)	1	(2.8)	0	(0.0)	
養護教諭実習生の指導や後輩への指導	非常に役に立った	10	(17.2)	12	(33.3)	1	(6.7)	p=.076 Ⅰ 型<Ⅱ 型, p=.137 Ⅰ 型>Ⅲ 型, p=.174 Ⅱ 型>Ⅲ 型, p=.040
	少し役に立った	36	(62.1)	17	(47.2)	8	(53.3)	
	あまり役に立たなかった	12	(20.7)	6	(16.7)	5	(33.3)	
	全く役に立たなかった	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	
	無回答	0	(0.0)	1	(2.8)	1	(6.7)	

a): 「非常に役に立った」から「全く役に立たなかった」を4から1で点数化して分析した。ただし、無回答は分析対象外とした。

b): Mann-WhitneyのU検定による多重比較の結果であり、有意水準はBonferroni法で調整した0.05/3=0.017を用いた。また、不等号は平均順位の大小関係を表す。

と同時に、養護教諭の実践の質もさらに高くなると考えられ、仲間や同僚、子どもから学ぶことが大切である。また、本調査結果から「勤務した各校での実践・努力や苦心したこと」として抽出されたカテゴリー【子どもの健康課題への対応】【教員としての関わり・対応】や、「学び・身に付けた力」として抽出されたカテゴリー【専門的な力】【子どもと関わる力】【教育面の力】は『日々の実践』に関係したことである。「多くの児童の多くの事例により、様々な面で力を付けることができた。」という記述からも、何のためにするのか、このことを通して子どものどんなことをつかもうとするのか、子どもの何が問題でそれをどのように変えたいと願っているかなど、子どもを中心に実践を据えた時、仕事の質が変わり、力量形成は実践からの学びにある（宍戸，2000）。よって『日々の実践』において、いかに実践を捉えるか、実践の意味付け、実践の問い直し、実践することの教育的価値を問い直していく関係の中で力量を形成し向上させていくのである（萩野ら，2002）。『日々の実践』を振り返ることの積み重ねが重要なことと考えられる。

そして、成長型のタイプ別で差がみられた「教育実践上の経験」で「非常に役に立った」がⅡ型97.2%、Ⅲ型53.3%、「学校内でのすぐれた人物との出会い」で「非常に役に立った」がⅡ型91.7%、Ⅲ型60.0%という結果や、成長型別の多重比較により「教育実践上の経験」と「学校内での研究活動」では、Ⅰ型とⅡ型がⅢ型より高く、「学校内でのすぐれた人物」ではⅡ型がⅢ型より高かった。これらのことはⅢ型が1年目から13年目までに特徴的な上昇がみられないなど、いずれの型にも属さないという型であることから、一つ一つの実践上での子ども・教職員との出会いを意味あるものとして捉え、より良くしていくためにどうあるべきかすべきか・いかに研鑽を積むかという姿勢が低いことによるものと推察される。これらから、『日々の実践』を自身の資質能力の向上・成長に役立つとして意味付けすることが重要と捉えられた。

2. 『学校外のネットワーク』に関して

成長に役立ったことで「非常に役に立った」と「少し役に立った」の回答を合わせて割合が高かった項目は、「学校外でのすぐれた人物との出会い」（98.2%）、「学校

外での研究活動」（91.8%）、「職能団体での活動」（81.6%）は『学校外のネットワーク』に関する内容と捉えられる。本調査結果から「勤務した各校での実践・努力や苦心したこと」として抽出されたカテゴリー【仲間の養護教諭との協働】や、「学び・身に付けた力」として抽出されたカテゴリー【養護教諭仲間としての力】は『学校外のネットワーク』に関係したことである。「養護教諭部会におけるグループ研究や研修に参加して多くのことを学んだと思う。グループ研究や研修がなかったらやらなかった仕事も多くあると思う。」という記述からも、養護教諭の成長には養護教諭仲間や研修会での指導者等外部からの影響が関係していることも明らかになった。

養護教諭は学校内に一人の配置であり日常的に自己の実践を振り返る機会がなかなかないが、同職種である他校の養護教諭との交流の中で自分の実践を振り返り、より良いものにするためのヒントを得て、自己評価の機会を得ていると推測され（山道ら，2002）、仲間から学ぶ機会を自分自身で作り出していくことが必要（宍戸，1996）であると言える。また、成長型別の多重比較により「学校外での研究活動」ではⅡ型がⅠ型より高かったことから、新任期からの6年間ほどはまだまだ外に目が向かないことが伺える。

3. 『自己啓発』に関して

資質能力向上・成長には環境や他者からの影響のみでなく、養護教諭自身の姿勢・モチベーションも規定要因と考えられる。「非常に役に立った」と「少し役に立った」の回答を合わせて94.5%あった「自分自身の意欲や努力」は『自己啓発』に関する内容と思われた。また、本調査結果から「勤務した各校での実践・努力や苦心したこと」として抽出されたカテゴリー【自身の気持ちや生活のこと】や、「学び・身に付けた力」として抽出されたカテゴリー【内面の力】は『自己啓発』に関係したことである。「養護教諭は一人であり孤独感を感じることが多かった。良い意味で頼れない（頼らない）…という気持ちを持つことを意識し、自分でまず頑張ってみた。」という記述からも、自己のモチベーションを高めることが大切であると言える。

浅野（2013）はHackman Oldmanの理想職務の特性モデルを用いて、自分を成長させるための要因について、

「スキルの多様性、職務の主体性、課題の重要性、自律性、フィードバック」、それらに加えて媒介変数として「成長欲求の強さ」をあげ、このように成長には意欲がカギとなると述べている。このことや「非常に役に立った」と回答した割合が成長型のタイプ別で差があった「自分自身の意欲や努力」でⅡ型68.6%、Ⅲ型20.0%という結果から、Ⅲ型は1年目から13年目までに特徴的な上昇がみられないなどいずれの型にも属さないという型で、Ⅲ型は『自己啓発』が低いいため特徴的な成長が遂げられにくかったのではないかと思われる。自らの実践から学ぶ自己学習と、実践に対し仲間から評価、理解され、仲間と共に学ぶ対話的学習の両者の関係のなかで、資質能力の発達のレベルが左右される（萩野ら, 2002）という点では、より自己理解を深め自己受容していく『自己啓発』が、資質能力を向上・成長させる要因になっていると思われる。

これらから『日々の実践』『学校外のネットワーク』の成長型のタイプ別の結果と同様に『自己啓発』においても、資質能力向上・成長では中堅期が大切と思われる。

謝辞

本研究にご理解と協力いただきました皆様に心より深く感謝申し上げます。なお、本研究は第21回日本養護教諭教育学会学術集会にて発表した内容に加筆・修正したものである。

文献

- 浅野良一. (2013). 組織人としての教師のキャリア発達を考える. 日本養護教諭教育学会 第21回学術集会抄録集, 56-57.
- 萩野和美, 林照子, 江原悦子, ほか. (2002). 養護教諭の力量形成に関する研究(その2)-力量形成要因の分析及び経験年数による比較-. 大阪教育大学紀要, 51(1), 181-198.
- 小林冽子. (1996). 養護教諭の職能成長に関する研究-志望大学生と現職者の自己教育の能力と他者の支援についての検討-. 学校保健研究, 38, 346-359.
- 小林冽子. (1997). 養護教諭の職能成長に関する研究-現職者に対するインタビュー調査を通して-. 千葉大学教育学部研究紀要, 45, 127-140.
- 大谷尚子, 豊崎友子. (1984). 養護教諭の力量形成に関する研究-本学卒業生の自己評価とその成長条件-. 茨城大学教育学部紀

要, 33, 33-47.

宍戸洲美. (1996). 養護教諭に求められる力量とその形成について.

日本教育保健研究会年報, 3, 9-15.

山道弘子, 中朋子. (2002). 養護教諭のキャリア発達に関する研究-キャリア発達への影響因子に焦点をあてて-. 茨城大学教育学部紀要, 51, 141-151.

(受稿日 平成25年 9月 2日)

(採用日 平成26年 2月 6日)